

トップニュース



本願寺新報
hongwanji journal

3月1日(日曜日)

毎月1日・10日・20日発行

発行所 本願寺新報社

京都市下京区堀川通花屋町下ル 浄土真宗本願寺派(西本願寺)
〒600-8501 本願寺出版社内

電話 075(371)4171(代) / FAX075(341)7753

宮城の復興住宅で500食振る舞う

長野教区が「そば」で交流

東日本大震災から9年を迎えようとしている。長野教区は東北ボランティアとして、大震災直後の2011年3月から5回程度東北を訪ね、信州そばを振る舞う支援活動を行っている。2月17、18日には47回目の活動を行った。

長野教区のボランティアを振る舞った。ア15人が2月17、18日、長野別院(長野市)か宮城県石巻市の災害復興公営住宅4カ所を訪れ、信州特産のそば500食

野名産の野沢菜も添え、お土産としてリンゴも準備した。活動は47回目となる。東北教区災害ボランティアアセンダーを介して宮城県内で活動してきた場所は、震災当初は避難所、その後は仮設住宅、災害復興住宅と変わっていった。この変化がそのまま復興の現状を物語っている。

津波で家を失った被災者は、仮設住宅から災害復興住宅に移り、日常生活を取り戻しつつある人も増えた。ここでは、新たに暮らす人と人をつなぎ、地域コミュニティを作ろうと、お茶会サロン活動などが集会所で続けられている。

ビハール長野の中島清志さん(59、長野県須坂市・圓光寺住職)は「災害発生当初は空腹を満たすためにそばを食べてもらっていた。今は、そばを食べてもらう中で生まれる交流を大切にしている」と、サロン活動に目的が移ったことを話す。

17日、石巻市・筒場復興住宅の集会所には80人が集まった。貫洞たえ子さん(71)は「おそばがおいしかった。長野から遠路来てくださり感謝している。独りぼっちだと寂しくなるから、声を掛け合い支え合うサロン活動は大事。今日初めて集会所で会う方もいてうれしかった。まもなく9年。津波が襲ってきた時は言

東日本大震災直後の「炊き出し」から継続し47回目

葉も出なかったが、皆さまの支援のおかげで、笑って語り合えるようになった」と話した。石巻市の災害復興住宅は139棟、約4500世帯が暮らす。同市社会福祉協議会復興支援課の高橋泰さん(49)は「自宅にこもりがちな単身高齢者が心配。健康体操などを集会所で行っているが、こうして「お客さまが訪ねてきてくださる」ことで、普段出てこられない方に新たなつながりを持ってもらえる。ボランティア活動が減少する中で、とてもありがたい」と喜ぶ。

このボランティアは、ビハール長野が中心となり教区内に募集を行い、これまで延べ600人近い人が東北を訪れた。また、支援金や支援物資も多く寄せられている。

ボランティアに35回参加する門徒推進員の丸山次男さん(76、木島平村・宣勝寺門徒)は「親鸞聖人の教えを学び、御同朋とともに活動させていただけるのは喜びでもある」と語る。当初から毎回のようボランティアに参加する信濃むつみ高校(長野県松本市)からも今回、生徒6人と教諭2人が駆けつけた。竹内忍教諭(60)は「ビハール長野の講座を通してつながりがあり、震災発生直後から活動に参加させてもらった。被災地を訪れ、人と直接触れ合うことで生徒は大きな学びをいただいている。長野教区の真摯な活動と学びには頭が下がる」と話した。

同教区は来年度いっぱい区切りとして、活動を終わらせる予定。

(8面に関連記事)